

遥かな国の冒険譚

風に揺れる 花の中で

作 雪村月路

絵 池田 優



どこまでも、どこまでも、見渡す限りの野原を、たおやかな白い花が埋めて、風にそよいでいた。やさしく青く晴れた空には、ちぎれた真綿に似た雲が、ゆっくりと流れている。

夢を見ながら夢だと気づくことは珍しかったが、あまりにも曇りなく心に沁みる光景だったので、彼は意識の片隅で、ああこれは夢なのだ、と理解していた。

野原の中にひとり立ち、さらさらと長い金色の髪をやわらかな風に任せて、彼は、これほど優美な夢の中になら、愛しいひとが訪れてくれないだろうか、と思った。

——夢の中で願うことは、夢の中で叶うことがある——。

少し離れた前方で、空気から溶け出すように、ふわりと。

そのひとは姿を現し、花の咲く野に降り立った。

ゆるやかに波を打つ、金を紡いだような髪。のぞく横顔の、雪のように白い肌。

うっすらと光り輝いているように見える姫君は、薄桃色の布を幾重にも重ねたような、ふんわりした長袖のドレスを着ていた。

いつものように、清らで、可憐で、瑞々しく美しいその姿を。

いつものように、彼は、胸の奥深くに、大切に大切に刻み込んだ。

離れて見つめているだけで、幸せな気持ちに満たされた。だが、ミルガレーテ姫はあたりを見回し、セレンに気づくと、驚いたように一步あとずさった。

思わず、セレンは呼びかけていた。できるだけ相手を怯えさせないようにと、願いながら。

「どうか、行かないでください」

「は、はい」

ためらいがちに応じて、姫君は心細そうに、胸の前で両手を組み合わせ、何かを待った。

——自分の言葉の続きを待っているのだ。と、セレンが気づくまで、少しかかった。そうか、引き止めたからには、話があると思われて当然だ。だが、彼はただ、姫君の姿をもっと眺めていたいだけ。いったい何を話したら良いのだろう。

常日頃、すらすらと口にできる社交辞令の挨拶が、こんなときには、ひとかけらも出て来ない。何か言わなくては、と焦る心だけが、空回り、空回り……。

結局、先に口を開いたのは、姫君のほうだった。おずおずと。

「あの……セレン？」

「はい」

「わたくしが、会いたいと願ったから、わたくしの夢の中においでくださったの……？」

「……いいえ。ぼくが会いたいと願ったから、あなたがいらしてくださったのでしょうか」

「でも、ここは。この野原は」

姫君は、野原を見渡してから、セレンに視線を戻し、すこし緊張をほどいて、微笑んだ。
「わたくしが、いつも夢の中で訪れる場所です。だから、これは、わたくしの夢です」

否、これは自分の夢だ。

と、セレンは知っていたが、姫君の明らかに安堵した様子を見れば、異議など唱えよう筈もなく。自分ひとりに向けられた微笑みに、心はふわふわと舞い上がった。

もちろん、夢のからくりには気がついていて。つまり、夢の中だから、「こうであればいい」と願う気持ちが、見たいものを見せ、聞きたいものを聞かせているのだ。

そう、夢だとわかっている。でも、だからこそ。このひとときだけ、願いの叶う幸せに溺れよう。

ミルガレーテは、ほんのりと頬を上気させ、白い花の中をゆっくりと近づいて来た。手を伸ばしてもわずかに届かないだろうあたりで、足を止め、はにかみながら言った。

「私ね。セレンと、こうしてお話、してみたかったの」

鈴を振るような心地よい声に、セレンはうっとりとして聞き惚れる。しかも、「お話、してみたかった」とは！ 夢ではあっても、身に余る光栄だ。姫君は、さらに続けた。

「夢の中でお話できたから、夢から覚めても、勇気を出して、お話できるかしら」

「できますよ、きっと。ぼくも、あなたとゆっくり話せたら嬉しいと思っています」

セレンは優しく請け合った。彼自身が、この夢を見たことで励まされる気がした。ひとり静かに想っていることを、許されたような気がした。

しかし、おそらくは、あまりにも幸せな気持ちに満たされた反動で、彼は不意に、怖くなった。永遠を生きる姫君と、いつかは道を分かつときが来るのだと、鉛色の予感がささやいた。

「ミルガレーテ。臆病なぼくのために、約束してくれませんか」

「約束？」

「いつかあなたが、ぼくの前から姿を消す日が来たら。最後に立ち去るときに、そのことを教えてください。愚かなぼくが、あなたの訪れを待ち焦がれて狂うことのないように」

姫君は、びっくりしたような顔をして、

「私より先に、セレン、あなたのほうが、私を置いて、行ってしまおうでしょう？」

「永遠を生きることはできなくても、この魂はずっと、あなたのものです」

静かに言い切ったセレンを、姫君は、じっと見つめた。それから、うつむいて言った。

「・・・わかりました。約束します」

ふと、セレンは、姫君がこのまま消えてしまうのではないかと思った。

——夢の中で恐れたことは、夢の中で実現する——。

気がつけば、姫君は、来た時と同じように、空気に溶けるようにして消え去っていた。見えるのは、風にそよぐ白い花ばかり・・・。

どこまでも花の咲く野にひとり残されると、途方もなく大きな喪失感が訪れた。覚え、涙がこぼれた。

――頬を伝う涙の感触に、セレンは目覚めた。

潤む視界に、陽光の差し初める明るさを感じた。

夢で見た、どこまでも続く白い花は、くっきりと胸に焼き付いている。が、現実には、ここは、街道近くの小さな林の中だった。

木の根元に座りこみ、固い木にもたれて眠ったせいで、体がこわばっている。珍しく一人での野宿だったので、誰にも涙を見られなかったのが、せめてもの慰めだった。

幸せな夢を見たはずなのに、この喪失感は何なのだろう……。

苦笑しながら身じろぎしたとき、左肩の違和感に気づいた。なにげなく目をやって、セレンは目をみはり、しばし呼吸すら忘れて固まってしまった。

セレンの左の肩の下に、そっと頭をもたせかけて、ミルガレーテがすやすやと眠っていた。夢の中と同じように、薄桃色の長袖のドレスを着た姿だった。

動転したセレンの頭の中を、様々な思いがぐるぐると駆け巡る。

ここはまだ夢の中なのか？ いや、そんなはずは。毛布をかけたほうが。どうして夢と同じ服を。というより、無防備に過ぎるだろう！

そう簡単に男を信用してはいけない。ことに自分のような。いや、自分だから良かったけれど。と、そこまで考えて、気が付いた。

そのとおり、セレンは、信用されたのだった。

半ば呆然としているセレンの目の前で、ミルガレーテは身動きして、目を覚まそうとしている。どうしよう、セレンはまだ身支度を整えていない、それでも、ああ、どうかどうか、この金色の小鳥が、目を覚まして逃げないでいてくれますように。

祈るような思いで見守っていると、ミルガレーテは、金色の長い睫毛をあげて、何度かまばたきをし、セレンの腕から離れた。辺りを見回してから、セレンのほうを見上げ、目が合っ、驚いたように、ひゅっと息をのんだ。

悲鳴をあげられてしまうのだろうか。誓って、何も不埒なことはしていないのに……？

セレンが固まっていると、幸い、ミルガレーテはゆっくりとまばたきを繰り返しながら、少しずつ落ち着いていった。時間はかかったが、怯えた様子は消えて、姫君は目を伏せ、恥ずかしそうに口を開いた。

「セレン。あなたが、会いに来てくださる夢を見ました」

セレンはどきどきした。まさか、同じ夢を見たなどということがあるだろうか？ どうせ夢だからと、胸のうちを告白してしまったような気がするのだが……。

「約束を、しました。二度と会えなくなる日が来たら、それをお伝えすると」

間違いなく同じ夢だ。そして姫君は、それを姫君ひとりが見たのだと思っている。

やっとのことで、セレンは気持ちを立て直し、にっこり笑った。

「ありがとう、ミルガレーテ。でも、ぼくはまだ、あなたと共に日々を過ごしていきたいな」

ミルガレーテは、視線を上げて、つられたように微笑んだ。

「私も、セレンといろいろお話をしてみたい……」

「では、今日は、人が通るところまで、ぼくと一緒に行きませんか」

「はい。喜んで」

いつか、約束が果たされる日は訪れるのだろう。だが、今ではない。
白い花咲く野で交わされた、それは、別れの約束。

(完)

遥かな国の冒険譚
風に揺れる花の中で

<http://p.booklog.jp/book/96408>

作: 雪村月路

著者プロフィール: <http://p.booklog.jp/users/ariadnemaze/profile>

ブログ: <http://snow-moon.cocolog-nifty.com/>

絵: 池田 優

ホームページ: <http://web.thn.jp/chocalo/>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/96408>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/96408>

電子書籍プラットフォーム: ブクログのパバー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社: 株式会社ブクログ

遙かな国の冒険譚

光り姫

<http://p.booklog.jp/book/96386>

王女フィリシアが、妖精を統べる〈光り姫〉ミルガレーテと初めて出会った、夏の日のこと。

遙かな国の冒険譚

化身の魔女

<http://p.booklog.jp/book/96559>

旅の途中、ルークとセレンは、道案内の少年と行動を共にする。魔女に出くわさないように案内する、と少年は言うのだが…。

遙かな国の冒険譚

跳ぶ

<http://p.booklog.jp/book/98350>

リーデベルクの王子フルートと、その友セレン・レ・ディアの少年時代のエピソード。

13才になったセレンは、国王に拝謁することになり…。

遙かな国の冒険譚

始まりの物語・風の贈りもの

<http://p.booklog.jp/book/97421>

シリーズの読み始めに適した2編を収録。
リーデベルクの王子フルートと、クルシュタインの王女フィリシアの、
旅の由来と、道中の1ページ。

遙かな国の冒険譚

火の鳥

<http://p.booklog.jp/book/96700>

フルート、フィリシア、セレン、ゼラルドの一行は、旅先で、
さわると熱い卵をひとつ、手に入れたのだが…。

遙かな国の冒険譚

夜を越えて

<http://p.booklog.jp/book/97502>

囚われの巫女を救うことはできるのか。
紅い耳飾りの導く先で、フルートとゼラルドの見たものは。

～ 作者より ～

夢の中で願うことは、夢の中で現実となることがある。
夢の中で恐れることも、夢の中で現実となることがある。

夢って、ふしぎ。

お気に入りのお話のうちのひとつです。

読んでくださる方々の胸にも、ほんのり淡く、
ふわりと溶ける温もりをお届けできたでしょうか？

(雪村月路)

～ イラストレーターより ～

一通り読ませていただいて、風景がふわっと頭の中に浮かびました。
ファンタジックな絵を描くのが好きなので、楽しく描かせていただきました。

私には、二人のいる夢の世界が表紙のように見えたのですが、

みなさんにはどう見えたでしょうか。

少しでもこの美しい世界観を想像するお手伝いができたら嬉しいです。

(池田 優)